

佐賀県 Saga Pref. (肥前 Hizen)



吉野ヶ里歴史公園から

佐賀県では、中南部の有明海沿岸地域を中心に県内各地から、有明海越しに“[北面～北西面の雲仙岳](#)”が眺望できます。空気がよく澄んだ日には、北西の黒髪山や城古(じょうご)岳、北部の作礼山や天山、北東部の脊振(せふり)山から、多良岳・佐賀平野越しに雲仙岳が眺められます。有明海沿岸の白石町や嬉野市では、雲仙岳が中学校や高校の校歌にも登場し、地域で古くから親しまれてきたことが分かります。

国の特別史跡に指定されている吉野ヶ里遺跡は、弥生時代の1～3世紀に国内最大級の環壕集落を発達させましたが、実はその遺跡内の建物配置の中心線が発見されており、そのラインは約60km南方の雲仙岳に向かって延びています。これは、約2000年前の吉野ヶ里の人々が雲仙岳を見ながら建物配置を決めていったことを示唆しており、有明海の奥にそびえる雲仙岳は古代からランドマーク(目印)として機能していたと言えます。

有明海に面する佐賀平野は、有明海の干潟の干拓によって面積を拡大し、豊かな水田地帯を形成してきた歴史がありますが、全国一の規模を誇る有明海の干潟の泥は、かつての阿蘇山の大噴火による噴出物を筑後川や嘉瀬川、六角川等が日々流し込んでいるもので、それが外洋に流れ出さないのは、雲仙岳そびえる島原半島が有明海の水の出入口を狭めているためです。また、多良岳や天山からは、天気が良ければ南東方面に阿蘇山が眺望でき、阿蘇山と雲仙岳の間の歴史的な大三角形(※阿蘇地域のページ参照)を視覚的にイメージすることも可能です。

中世の時代には、佐賀領主の龍造寺氏が、雲仙岳そびえる島原半島の領主・有馬氏を攻め、有馬氏の援軍要請を受けた薩摩領主の島津氏と有馬氏を相手に雲仙岳東麓の沖田畷(なわて)で戦い、大将の龍造寺隆信が討ち取られてやむなく撤退した歴史があります。その後、豊臣秀吉が九州征伐を行った際には、雲仙岳北麓の北目地域の一部(神代(こうじろ)村など)が佐賀領として与えられました。江戸時代に入り、龍造寺氏家臣の鍋島氏が佐賀藩主となると、神代村に北目統治の拠点が置かれ、分家の神代鍋島氏が幕末まで治めました。他方、本家の鍋島氏によって“海の守護神”として崇敬された現・佐賀市内の“四面神社”は、実は雲仙岳の山岳信仰の神(温泉四面神)を祀る神社で、参道は雲仙岳のそびえる南方へと延びています。

雲仙岳の主峰である普賢岳には、夏でも4℃程度に保たれている風穴が10以上あり、かつては風穴内で氷が作られていました。江戸時代の島原藩主は、(佐賀藩を含め)近隣の藩に暑中見舞いとして普賢岳の氷を贈っていたと言います。明治7年の“佐賀の乱”の際には、戦場で普賢岳の氷が販売されたとも言われます。また、明治時代には、カイコの卵の冷蔵保管庫として重宝され、本県を含め九州全県の養蚕家から普賢岳風穴の管理者へ、卵の保管委託がありました。

上記のようなストーリーを楽しめる散策道として、九州全県をつないで一周するトレイル“九州自然歩道”があり、県内の山岳地帯を東西に横断するトレイルは、雲仙岳を眺望できる黒髪山や天山、脊振山などを通して、遥か雲仙岳まで続いています。

雲仙岳の様々な表情を探しながら、佐賀県内を旅してみませんか？